

メディア掲載情報

媒体名	CONFRT
掲載号	2007年9月号
掲載日	
掲載内容	MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO カツデンアーキテック 対談記事

建築家の感性をカタチに……。そんな姿勢で斬新な製品を次々と開発。

原田真宏・麻魚 × 坂田清茂
MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO カツデンアーキテック代表

「誰もがつくれないものをつくる。誰もがつくろうとしないものをつくる」という基本姿勢を貫いて、アルミ製手すりやスチール製階段など、新しい製品を次々に開発してきたカツデンアーキテック。製造の現場を知って、自分たちのデザインや考えと組み合わせれば、もっとおもしろいことができるんじゃないか、と考えるMOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIOの原田真宏・麻魚さん。大量生産とも手工業的な一品生産とも異なる、これからのものづくりについて、語っていただいた。

取材・文・現場写真 塩野哲也



ノックダウン式の螺旋階段「モデリア」。1.8×1.8mのひと坪サイズに納まるように設計されている。段板の裏面も綺麗に処理していて、ジョイント部分の精度も高い。しっかりとした踏み心地で、上り下りする楽しさと、安心感を両立させた。螺旋階段は、家族のコミュニケーションを高める効果もあるという。



坂田清茂 (さかた・きよしげ) カツデンアーキテック代表取締役。1962年東京都生まれ。東洋大学工学部建築学科卒業。1984年カツデン入社、営業、開発、品質管理などを経て、2001年新規事業の室内スチール製階段の企画を立ち上げる。2003年カツデンアーキテック設立。代表取締役に就任。

ノックダウン式直階段「オブジェア」。写真はトラスタイプで木段板と横さん手すりを使用。段板には他にガラスやパンチング、エンボスなどがある。



画期的だった水平ラインの手すり
カツデンアーキテックのルーツは、アルミ製のテレビアンテナの製造・販売であった。その後、建材分野に進出。水平ラインを強調した画期的なアルミ製手すり「KDライン」(K Design)は、美しいデザインが建築家の注目を集めた。社長の坂田清茂さんは語る。「ある建築家から、水平ラインを強調した手すりがつくれないかと相談を受けました。その頃の手すりは縦格子に代表されるように垂直ラインを強調したものはばかりでした。線のラインは強さを表現できるが、どうしても無骨になりやすい。大学で建築を学んでいた坂田さんは、建築家の意図をよく理解し、市場になかった製品を世に出すまでができたのだ。」



水平ラインを強調した手すり「KDライン」は、建築家から高い評価を受けたロングセラーである。

今回、同社の工場を訪れたMOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIOの原田真宏・麻魚さんは、階段のデザインにも大きな関心をもっているという。「建築の平面プランは、合理性や機能が優先されることが多いけれど、階段は建築家の造形力が活かされる腕の見せどころと言えるでしょう。モダンストと呼ばれる建築家たちでさえ、彫刻的なオブジェのような階段をデザインしています。それだけに既製品では満足できず、特注することになります。しかし、特注品にも課題があると坂田さん。

本記事の内容は雑誌・媒体掲載時の情報です。
発表内容・製品仕様など発表当時と現在とで異なる場合があります。
あらかじめご了承ください。



メディア掲載情報

媒体名	CONFRT
掲載号	2007年9月号
掲載日	
掲載内容	MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO カツデンアーキテック 対談記事



工場内部。レーザー加工機の動きが目をひく。自動的に鉄板を取り替えることで24時間、無人で加工を続けられるマシンもある。このマシンの加工精度が、階段の品質を支えている。



ついついディテールに目がいってしまう。段板を取り付ける金具の溶接跡がほとんど分らないことに驚く。従来のスチール製の階段のイメージとは、まったく違う美しさがある。ジョイント部分の改良は常に続けている。



カツデンアーキテックのショールームには、螺旋階段や直線階段など様々なタイプのスチール階段が展示されている。



原田真宏（はらだ・まさひろ）=左
1973年静岡県生まれ。芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了。隈研吾建築都市設計事務所を経て、ホセ・アントニオ・エリクス・トレス アーキテック（ビルセロナ）に所属。磯崎新アトリエののち、2004年「MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO」設立。慶應義塾大学・芝浦工業大学非常勤講師。

原田麻魚（はらだ・まお）=右
1976年神奈川県生まれ。芝浦工業大学建築学科卒業後、建築都市ワークショップ所属。2004年原田真宏と共に「MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO」設立。



MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIOの最新作「SAKURA」。ステンレス板に無数の穴をあけ、伝統的な桜の小紋柄を表現した壁が特徴的な住宅である。積極的に協力してくれる工場があってこそ、アイデアが実現した。写真：新良太



埼玉県栗東市にあるカツデンアーキテック工場。建築そのものもスマートで目を惹く。

カツデンアーキテック

〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-12-8
八丁堀SFビル7F tel 03-3552-5018
<http://www.katzden.co.jp> (資料請求番号0027)

「手すりや階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

①現場で組み立てるだけのブロックタイプであること。
②通風や採光、視界を妨げない、スチールであること。
③エレメンを極力減らし、細部にもこだわった美しいデザインであること。

「これらの目標を達成するために、使い慣れたアルミではなく、スチールを採用しました。スチールはアルミの3倍の強度があり、部材をスリムにでき、形も自由に仕上げられるからです。」

「とはいえ、その転換は一筋縄ではいかなかった。当初は予想もしなかった問題が次々と発生。しかしそれを乗り越え、改良を重ねて現在にまで至っている。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」

「この階段は、安全性や強度の実証試験が大切です。一点もだれと、それが十分にできない場合もあります。我々は階段を製品化するにあたって、様々な試験と改良を繰り返しています。」



雑誌「CONFORT」の表紙。自然をとりこむ家というテーマで、美しい自然風景が写っています。